# メディアとしての絵はがきはどう使われたか －伊藤家の交遊をめぐる小さな喜び－

新潟大学人文学部 教授 原田健一

## 1．絵はがきが普及し始めた頃

現在のような切手を用いた、重量別、全国均一料金制の近代的な郵便システムが制度化されたのは、1840年からである。イギリスにおいて始まり、その後、各国で取り入れられることになる。はがきは、オーストリア・ハンガリー帝国で1869年10月に発行され、1870年にはドイツ、イギリスで採用され、それ以降各国が続くことになる。絵はがきを可能にする、私製はがきの制度は、1870年にドイツではがきの採用と共に認められ、順次、各国でも採用されることになった。

この私製はがきに絵を入れたはがきの最初は、1870年の普仏戦争のとき、ドイツの A. シュワルツが官製はがきに兵士と大砲を印刷したものだとされる。どちらにしても、戦争をきっかけにして、ドイツとフランスで絵はがきが盛んに使われるようになる。その後、ヨーロッパでは、さまざまな絵はがきが出され収集が盛んになる。

ところで、日本における欧米の郵便制度の本格的移入は、1873年で、私製はがきの発行は、1900年からである。1902年には万国郵便連合加盟25年記念の絵はがきが発行され、人気を呼び、1904～06年に発行された日露戦争戦役記念郵便絵はがきが空前の売れ行きとなり、絵はがきが社会に定着することになる。(1)当時の様子について、書いたものをみてみよう。

「（1904年）八月下旬から戦闘を開始した我軍は、九月初めに遼陽を陥落せしめた。この時の我軍の損害は実に夥しく、今書物で調べて見ると一万七千五百三十九人となっている。非常な激戦で、敵もその割合で死んでいる筈だ。とにかくこれで、この戦争にやや目鼻がついて来たように思われる。沙河の大戦にまた勝った。そういうことのある度に東京市民は戦捷祝いをやり、郵便局では戦捷記念絵はがきを売り出した。（略）この戦捷記念絵はがきに依ってとうとう絵はがきの流行を来し、誰でも絵はがきを買うことが珍しくなくなった。とにかく三枚一組の戦捷記念絵はがきの契機は素晴らしいもので、郵便局へ早く買いに行かないと、じきに売り切れてしまう。熱心な連中は、明日売り出すことが知れると、まだ夜の明けない中からおしかけて、郵便局の事務の始まるのを待つという騒ぎだ。誇張でなく江戸橋の郵便局では、押すな押すなと押しかけた群衆の中に窒息して死んだ少年が二人までもあった。多分この秋の頃かと記憶する。煙草が官営になり悪質になり而して俄かに高価になったのは。」(2)

戦時下、あまり多くは語られない人びとの訃報とは裏腹に、戦勝を祝う絵はがきに人びとが群がり熱狂する。当然のことながら、官営絵はがきの刊行、そして煙草の官営化も戦費調達の目的のためであった。ところで、しかし、人びとはなぜ、絵はがきにかくもまでも熱狂したのだろう。

佐藤健二は、絵はがきが大衆化する過程には、一つ目として郵便制度に私製はがきのシステムが導入されたことあげ、二つ目に郵便制度そのものが国際的なネットワークをもち、ローカルとグローバルなものをつないでいたことを指摘している。つまり、欧米の絵はがきの流行は、そのまま日本の絵はがきの流行となって拡がるような国際的な繋がりが、メディアに内在していた。

そして、三つ目に何事かを記念する絵はがきの誕生をあげている。そこには、戦争という大きな事件が絡み合う。既に述べたように、最初の絵はがきが普仏戦争をきっかけとして発行された慰問はがきであった。また、日本において、絵はがきが定着するのも日露戦争によってである。確かに、絵はがきの内容をみると、戦争と国家の表徴である天皇は、大きな割合を占めている。また、戦争の様子を伝える絵はがきは、その後、事件や天災地異の災害、例えば、関東大震災などの様子を伝えるものへと展開していくことになる。

また、一般の庶民にとって、戦争は見ず知らずの異境の地に行くことを意味し、国家規模の人間の大移動として、新しい旅の経験となった。旅先の各地の物珍しい風景や民俗などの絵はがきを送ることは、兵士にとって数少ない楽しみであった。こうした気持ちや感情は、旅先で名所旧跡の絵はがきを送る習慣へと転化していく。

また、逆に、残された家族や友人たちは、戦地の兵士となった人びとのことを思って、慰問としてさまざまな物を送った。その中に、芸妓の美人絵はがきがことのほか好まれた。こうした美人絵は浮世絵の伝統を引き継ぐだけでなく、スターのブロマイド写真、さらにはピンナップ・ガールへと発展する。(3)

絵はがきという一つのメディアが社会へ普及するのに、戦争という国民的な経験が必要だったことは、思った以上に重要である。ところで、先の証言で、日露戦争時、戦争に行った友人たちからもらったはがきについて、「軍事郵便としてあって、ただのはがきとは違っているのも何か特別な感じを与えた。正宗は手紙で戦地の寒いこと、荷物を積んで車を引いて行く時はそう苦しくもないが、空車になってから帰る時の寒さが身に沁みて辛いと書いてあった。そして国家のためとは言いながら何故露西亜と戦をしなければならないのか、その意味さえ解らずにこんな苦労をすることは実に馬鹿らしい、と泣きごとが述べてあった」(4)という。死にたくないというのは、誰しもが思う本音である。多分、絵はがきというメディアが爆発的に社会に広がる背景には、勇ましい愛国のかけ声とは裏腹にある人びとの声にならない、声にしてはいけない、小さな怒りがあった。

## 2．贈与としての写真、絵はがき

しかしながら、絵はがきというメディアが社会に広がるにあたって、人びとの心の底にあったのは、こうした小さな怒りだけであろうか。少し観点を変えてみよう。

加藤秀俊は、絵葉書は「パリに着いたお嬢さんが、母親や友だちあてに、無事つきましたといったことをほんの二、三行書いて送る。絵葉書というのは無意味なようで意味があり、意味があるようで無意味な」ものだとし、それは一種の贈答関係として成り立っているとした。そして、その内容は、要するに「私はここにいますという存在証明ですから、それまでの郵便とはまるでちがう」とし、それは、「用件のない郵便」だと指摘する。(5)

ところで、写真研究ではあまり指摘されないが、人びとは自らの写真を撮ってもらった時、プリントし、自分の知り合いに見せたり配ったりする。それは時に、卒業であったり、結婚であったり、子どもの出生であったり、また戦争の出征であったりなど、何らかの人生の節目を伴う。なぜなら、写真はさまざまな人生の儀礼と深く関わっているからだ。

人は誰しも、一人で孤立し生きていくことはできないし、なんらかの集団に所属し、人びとの関係性のなかでしか、自らを社会化できない。個人であれ特定の集団であれ、どこかで他の人びととの共同性を願望し、またそうした共同性に参加しようとする。そのために、自らの社会的位置を確認し、さらには強化するための効果を求めてさまざまな行動をし、またその地位を他の人びとに認識させようとする。

贈り物は、こうした時、社会的関係性を強化させようとする人びとの思いを顕在化させる社会的行動となる。M・モースは、贈り物は任意で行われるが、実際には義務的に与えられ、受け取られ、返礼されるとする。そして、こうした贈与のシステムが成り立つ動因として、呪術的・宗教的観念が、その背景にあるとする。(6)人びとは、信頼の証として贈り物をし、それに何らかのものを送って返礼することで、この信頼が正当であることを認める。これを拒否すれば、友情や交際を拒絶し、不信や敵意を示すことにもなる。

絵はがきのやりとりも、そうした贈与のシステムを引き継ぐものであり、家族として仲間として、共同性の儀礼として行うものといってよい。絵はがきを送るものは、また、それを返されることで、その関係性の絆を確かめる。もし、返されることがなければ、沈黙を守ることになる。

## 3．伊藤真砂の伊藤家における立場

ところで、伊藤家の絵はがきコレクションは、絵はがきが社会に広がった最初の時期の1905～1913年頃の約10年間のものであり、実際に使われたものが大半を占める。宛名はそのほとんどが伊藤真砂であり、送った人びとは、伊藤真砂の夫である六代伊藤文吉（謙次郎）の兄姉である伊藤成治、八代重などであり、あるいは伊藤真砂の実弟である村山亀一郎などである。

伊藤家は、明治に入り、地租改正による土地制度や租税制度の改革の大きな過程のなかで大地主となる。1870（明治3）年では約116町歩だったものが、約20年後の1892年には約637町歩となり、さらに1901年には約1,063町歩で、千町歩を越える大地主となる。この土台をつくったのは、五代文吉（要之助）と妻キイである。五代目夫婦は10人の子供たちを育てるが、五代文吉は1891年、48歳で亡くなる。21歳であった長男謙次郎が六代文吉となり、後を継ぐことになり、翌1892年、上越の刈羽郡岡野町の名家である村山家の次女真砂（当時16歳）と結婚することになる。六代目夫婦は、4人の子供たちを育てることになるが、六代文吉は1903年、33歳で亡くなる。七代文吉となる淳夫はまだ7歳であった。そこで、六代文吉の妻・真砂（当時27歳）が親権者となり、六代文吉の兄弟である次男・順造が押木家に婿入りしていたこと、三男は早世していたため、四男・九郎太（当時25歳）が後見人となる体制がつくられる。当然のことながら、五代目文吉の妻キイ（当時56歳）が全体をしきっていたことは間違いない。(7)

伊藤真砂に果たされた仕事は、巨大となった伊藤家の地主経営が円滑に進められるようにキイから実務を引き継ぎ、実際の仕事をする番頭たちの性格をのみ込み、仕事の分担、役割を調整することであった。また、もう一方で、夫の兄姉たちとの友好な関係をきづき、一族の結束を強めることである。親戚関係における当面の問題は、既に嫁いだ年上の長女・ルイ、次女・ラク、三女・リヤウ、四女・イツたちとの家同士の親類づきあいと、年下の四男・九郎太と五男・成治の分家、六女・テイと七女・八代重の結結婚であった。

ところで、伊藤真砂と伊藤家にまつわる人びととの絵はがきによるやりとりは、1903年以降、六代文吉が亡くなった時からはじまる。それは、世間一般の絵はがきブームと軌を一にするが、それだけではない思い、親族としての責務と愛情が込められている。ここでは、やりとりの多かった五男・成治と、七女・八代重の絵はがきをみてみる。

## 4．絵はがきの結ぶ絆と友愛

真砂が伊藤家に嫁入りした時、成治は10歳、八代重は3歳であった。長じて、六代文吉が亡くなった時には成治は21歳で東京帝国大学をちょうど卒業する頃で、八代重は14歳で女性として多感な時期であった。成治は卒業後も東京市牛込区矢来町の家宅に住み、後に分家している。伊藤家の六代目の兄姉たちや真砂も、しばしば東京の成治宅に訪れている。新潟から離れ、日頃顔を合わせないとなれば、手紙のやりとりは必然ともいえるが、成治からの葉書からはそうした事情だけでないものがみえる。

1907年3月12日（消印）付絵はがきの裏面に書き込まれた文章に、「特別上等製珍無類の絵はがき数葉、宛押木兄上、姉上の家、兄上、少妹上のは四人様へ本日小包を以て発送申し上げ候」（NC-C-114-1-039b）とあり、成治が絵はがきの収集、コレクションをしていたことがみえる。また、同年8月9日付け絵はがきの表面には、「物を貯め始めると散りすすきになるのが常で、殿堂遠からず。母上も爾りですが、姉上はさすがに絵はがきのため主義ならざるだけに、大分よいのを奮発なさるが誠に結構のことです。若し夫れ絵はがきを能く貯へ能く散すことなきの如きは、蓋し天下一人と申すべき歟」と、真砂が絵はがきを集めることに熱心なだけでなく、丁寧に保管している几帳面な性格を賞賛している。この絵はがきの裏面には、「むし干や　故人の衣　見つめけり　丁未八月九日」（A:NC-C-007-1-028b）と句も記されており、文学的な教養をもっていた成治の文人的な気質もかいまみえる。ちなみに、成治は新潟市古町に生まれた会津八一とは中学の時、同級生で親しく、後に八一は北方文化博物館・新潟分館に居住することになる。

ところで、成治の絵はがき収集はかなり熱狂的なものであったらしい。1909年2月23日（消印）の絵はがきの表面には、「御割愛の絵はがき@@及び最近の一葉たしかに共に拝受頂戴仕り候」と、真砂が大切にしていた絵はがきを成治に贈ったことが記されている。成治は、「美しく珍しく相見仕り、小生のアルバムで一異彩を放ち居り候」（NC-C-001-2-088a）と感激し、真砂の友愛に深い感謝を捧げている。どうやら、真砂は絵はがきを成治のように集めることより、それを通して兄姉たちとの絆を深めることに思いがあったとみえる。当然のことではあるが、真砂にとって、伊藤家の兄姉たちは、新しい家族である。

ところで、絵はがきに対する熱意は、成治だけでなく妹・八代重も同じものがあった。1906年10月5日（消印）付絵はがき裏面には、真砂の息子四男の威夫に触れて、「威ちやんは絵はがきなくしたそうです、かわりに少し送るつもりでございます」（C:NC-C-114-2-132b）とあり、一族で絵はがきを集めることが話題になっていた様子がうかがえる。1908年3月2日、東京に行った八代重は新潟の真砂に絵はがきを送り、裏面に「この絵はがき、おすき？おきらひ？どちらでございませう」（B:NC-C-007-1-133b）かと、姉に甘えるように尋ねている。

真砂は、八代重を小さな頃からかわいがっていたようである。八代重は、真砂が何やかやと気を配ってくれることを嬉しいと思い、また頼りにもしていたらしい。その前年の1907年5月23日付（消印）で送った八代重の絵はがきの裏面には、真砂が東京に来られなくなったことを残念がり、送ってくれた荷物にあった「きれいなきもの御送り下されまことにまことにありがたく姉君様の御心配、御心づくしのほどあつくあつく御礼申し上げます」（NC-C-114-1-088b）と、いつもながらの細かな気配りに感謝している。最も、1909年3月19日付絵はがき表面には、「恐入りますがまた味噌をおくっていただきたくございます（中へ味噌づけも御願ひいたします）」（D:NC-C-001-1-052b）と、東京に行くと、足らないものがあるとなにやかやと姉に頼んでいた様子もうかがえる。

A：NC-C-007-1-028b

ところで、八代重の絵はがきを見ていると何故か、自画像的な少女画や美人画が多いことに気づく。1906年10月5日付絵はがき裏面(C)の二人の少女写真には、繊細で自分の将来へ不安をもっている様子が感じられる。1910年11月に、八代重は新潟で同じような千町歩地主である斎藤家に嫁ぐことになるが、1909年3月19日付絵はがき裏面(D)の女優のポートレイトにある「今日、木村先生と上野の茶会へまいりました」は、東京で花嫁となるために様々なことを身につけていたものだろう。これに、結婚後の1911年11月29日付（E:NC-C-001-2-014b）、風邪をひいた真砂への見舞い絵はがきを並べてみると、八代重の女性としての心の成長がたどれるようにも見える。絵はがきならではの、面白さといえる。

B：NC-C-007-1-133b

C：NC-C-114-2-132b

どちらにしても、真砂のこうした家族への極め細かな配慮は、姑であるキイも同感であったらしい。東京に八代重と一緒に行き、真砂からの荷物を東京で受け取った1907年5月17日（消印）付絵はがきの裏面には、「昨日に小包有難く受け取り候、毎度ながらも御面倒掛け候」（F:NC-C-114-1-085b）と簡潔に記している。あまり筆まめでなかったキイとしては珍しく絵はがきを使って、感謝を述べたものである。キイは、この絵はがきで表面の下に文章を書かず、裏面の神女の画の顔の部分に小さく書いている。いかにも、信仰心の厚かった人らしい感覚である。

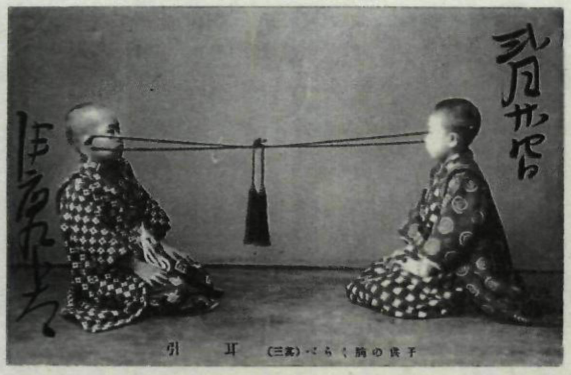
D：NC-C-001-1-052b

こうしたやりとりからは、家族の人たちのそれぞれの小さな喜びや、感謝の思いがみえてくる。その意味で、真砂が絵はがきを使うことを大切にし、一族の結束を強めるコミュニケーションのツールとしていたことが分かる。こうした時、絵はがきは日々の小さな友愛と信頼の証となり、フラジャイルで切れ切れになってしまいかねない一族の気持ちを繋げる、しなやかな伸縮自在なツールとなる。それは、伊藤家だけではない。多くの人びとの家で、秘かに、小さな喜びと、時に小さな怒りをと伴った行為として、社会と家族を結びつける。絵はがきは、こうして社会に普及し、人びとの心の底へと降りていくことになる。

E：NC-C-001-2-014b

F：NC-C-114-1-085b

注
(1)平凡社(1980)：
『世界大百科事典』日立デジタル平凡社
(2)宝月圭吾（1928）：
『昭和大正見聞史』中央公論社,1979, pp.169～170.
(3)佐藤誠二（1984）：
「幼ほがき荒野」『風景の生産・風景の解読』朝倉書店
(4)宝月圭吾（1928）：
『昭和大正見聞史』前掲, p.156.
(5)神野善治・宮田登（1986）：
『昭和メディア史』中央公論社,pp.180～182.
(6)Marcel Mauss (1968) : Sociologie et Anthropologie
（『聞き書』『社会学と人類学』吉田禎吾訳, 弘文堂, 1973）
(7)角田夏夫（1979）：
『孤島の郵』北方文化博物館




NC-C-007-1-126b　　子供の腕くらべ（其三）耳引

NC-C-007-1-130b　　子供の腕くらべ（其五）首引

NC-C-007-1-131b　　子供の腕くらべ（其四）指引

NC-C-007-1-139b　　子供の腕くらべ（其六）掛引

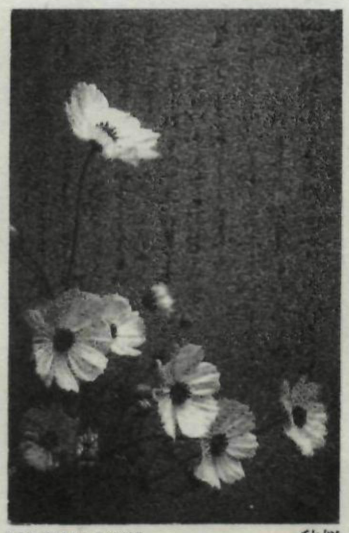
NC-C-001-1-192b　　（佐渡國畑野村字三宮）三宮神社

NC-C-114-3-06b　　聯合艦隊ノ主力的艦隊ニ向フ

NC-C-001-1-129b　　故乃木大将葬儀行列

NC-C-001-1-117b　　大阪中之島 日本銀行

NC-C-001-1-171b
哈爾賓ニ於テ韓国兇徒ノ為統殺サレシ故伊藤公爵



NC-C-114-1-002b　秋桜

NC-C-001-1-079b　花と女性

NC-C-114-2-052b　華厳の滝

NC-C-114-1-027b
シャトーランの老女（仏・フィニステール）

NC-C-001-1-048b　ねずみ
池上秀畝夫人・緑畝画
（五代文吉五男・成治の義母）

NC-C-007-1-180b　赤ん坊

飛行機隊並行の美観（ファールマン式複葉飛行機）

NC-C-001-1-088b
飛行機隊並行の美観（ファールマン式複葉飛行機）

NC-C-001-1-157b　織田三七郎信孝